

## 2024 年度 個人研究実績・成果報告書

2025 年 4 月 18 日

|            |                   |              |                                       |      |      |
|------------|-------------------|--------------|---------------------------------------|------|------|
| 所属         | 商経学部              | 職名           | 教授                                    | 氏名   | 中村 晃 |
| 研究課題       | 自己愛に関する心理学的研究     |              |                                       |      |      |
| 研究キーワード    | 自己愛・承認欲求・インテグラル理論 | 当年度計画に対する達成度 | 3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した |      |      |
| 関連するSDGs項目 | 4. 質の高い教育をみんなに    | 該当なし         | 該当なし                                  | 該当なし |      |

## 1. 研究成果の概要

本研究では、まず自己愛および承認欲求に関する先行研究や理論的背景について文献調査を行った。中でも、インテグラル理論は本研究において有用な理論的枠組みの一つとなり得ることが明らかとなった。そのため、本研究では自己愛および承認欲求の理解に、インテグラル理論の視点を取り入れて検討を行った。

不健康な自己愛は、「他者からの評価に対する過度な執着」として捉えることができ、これは承認欲求と深い関連性を持つと考えられる。しかし、これまでの研究では、承認欲求と自己愛との関係について十分に明らかにされてこなかった。Wilber のインテグラル理論によれば、人間の意識は、利己的段階、自集団中心的段階、合理性段階、相対主義的段階といった発達プロセスを経るとされる。さらに、Gardner は、人間の発達とは自己中心性の減少のプロセスであると述べ、自己愛の減少とそれに伴う意識の拡大を発達の本質として捉えている。本研究では、こうした意識の段階によって、承認欲求の強さやその内容、そして誰から承認を得たいのかといった点に違いが生じることが示唆された。それに伴い、承認欲求への対処法も段階によって異なる可能性があることが明らかとなった。

この点に関して、仏教思想が承認欲求の理解および克服において有効な視座を提供し得ることが示唆された。仏教において「自己」は固定的な実体ではなく、一時的・関係的に成立するものとされている。しかし、人はこれを不変の本質的存在と誤認し、それに執着することでさまざまな欲望や苦しみを生じさせると考えられている。仏教では、こうした自己への執着を「我執」と呼び、苦しみの根本原因の一つとされる。また、自己を他者と比較し、優越感や劣等感を抱く心の働きは「慢」とされ、我執から生じる煩惱の一つと位置づけられている。

すなわち、自己愛や承認欲求は、自己評価や他者との比較に基づいて形成されるもので、仏教における「慢」と共通する側面を持つ。したがって、「慢」への仏教的対処は、現代における不健全な自己愛や承認欲求へのアプローチに示唆を与える可能性があることが明らかとなった

## 2. 著書・論文・学会発表等

(できるだけご記入ください。査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載)

## 【論文 (査読あり)】

特になし

## 【著書・論文 (査読なし)】

特になし

## 【学会発表等】

特になし

3. 主な経費

研究のための書籍の購入、データの処理をするためのパソコン

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特になし

(本文は2ページ以内にまとめること)